

千人引きの木(ナギ)の葉と実

小 関 栄

わが家の庭に千人引きの老木がある。榎(ナギ)の木でマキ科の常緑樹だ。葉が特徴で平行筋の固い繊維で光沢があり、引っ張っても千切れない。だから通常「千人引き」「ちからしば」とも呼んでいる。春、新葉が出た後に淡黄色の可愛らしい花を咲かせ、それが夏には青い豆粒ほどの実になる(右上の写真)。これが秋になると次第に黒い飴玉の様に真ん丸い実になり晩春に古葉とともに落ちる。



日本には古くからある木で、平安時代の和歌に「千早ぶる 熊野の宮の ナギの葉を 変わらぬ千代の ためにしにぞ祈る」(藤原定家作)と歌われたように信仰の対象になっている。熊野地方では神木とされ、木の葉を鏡の裏や守り札に入れて災難除けとしている。奈良の春日大社の境内のナギ林は国指定の天然記念物になっているし、当地でも龍尾神社や可睡斎など神社、仏閣などにある。

わが家では創家時、庭に植えたもので樹齢は二百年近くになる。家のすぐ脇にあり、度々幹を切詰め枝も横に広がらないよう剪定したので、幹は大人一抱え、枝も腕の太さのずんぐりした樹形だ。家を象徴する「わが家の銘木」になっている。

(掲載の写真は、その「家の木」27.9.20. 撮影)

家護る 千人引きの 古木かな 淡水

☆第2回報徳美合セミナー出席

8月3日、4日と愛知県青年の家でセミナーが開催され、花の村から藤本と細谷さおりさんの2名が参加しました。全体では20名ほどの参加でした。二宮尊徳7代目の玄孫、中桐万里子さんの講演があり天道と人道の話を「水車の原理」を使って平明に話されました。中桐さんは関西学院大学の講師で臨床教育学が専門でむつかしい話をわかりやすく説明するので著名。若い人も数人参加していましたがグループに分かれての芋こじ(注)ではそれぞれの職場での対人関係や個人的な悩みを打ち明ける機会が期せずして設けられ、改めて世代間の断絶などクローズアップされました。報徳も現代が直面する身近な問題にも取り組む必要性を痛感いたしました。

(注) 芋こじとは桶に里芋をいれ、こじぼうで回すと芋同士が擦り合いお互いに皮がむけて白く綺麗になることから、話し合いを深めることによりお互いを理解し高めあうことを言う。(藤本記)